

[実践報告]

「その雪さわらせて」沖縄と交流 —テレビ会議システムを使った社会科の授業—

野口 泰秀・横山 裕充

北海道教育大学教育学部附属釧路小学校

“Let me touch the snow” – The meet of North and South: Classwork of social studies by TV conference system

Yasuhide NOGUCHI and Hiromitsu YOKOYAMA

Attached Elementary School, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-0805, Japan

1. はじめに

本校では、平成8年度よりWINDOWS 95オペレーティングシステムの環境下でパソコンを活用した学習を行ってきている。インターネットを使った学習、通信を使った学習、学習ソフトを使った学習などである。中でも通信を使った学習では、テレビ会議システム（フェニックス：NTT～以下フェニックスと記述）が、幅広い活用を提供してくれる。

フェニックス活用のメリットとして、目の前に持てくることができないものを見ることができ、離れたところにいる人達と話し合いができる、人材活用の幅を広げられるなどがあげられる。しかも、全てリアルタイムで行われることに意義がある。目の前にないものを見るものとしては、図鑑でも十分その役を果たすものであるが、今見ている目の前で動いている、話をしている、そこにある……という臨場感で、心への響き方が違うのである。

例えば、授業の中で、希望する人がこの場にいてくれたらどんなにいいだろうと思うときがある。暖かい地方の人々のくらしを学習しようとするとき、資料を調べたりするだけでは感じ取れないことも、実際に見たり、同じ年齢の人達が話をしてくれたらどんなに効果的だろう。まさに、知識を得ること以上に心に感じ実感・納得できることになるのである。実際に今、咲いている花の話を聞き、半ズボンに半袖シャツの姿を見ただけでも今まさに冬であるこちらの様子とは違うことを実感できる。

フェニックスを使った通信は、人と人とのコミュニケーションであり、パソコンを活用した学習の中でも、特に、学習効果や、子どもたちの世界を広げてくれるといった点で、効果的なものであるといえる。しかし、通信をする

ときには、相手がいることであり、やりとりするための慣れが必要である。子どもたちが、このシステムを日常的に扱うことができるようになると、もっと良いであろうと考えるのである。

そこで、本校では発達段階に応じて、その方法を徐々に身につけ日常的なものにしようと考えている。まず、低学年では、導入期であるので、形式的なやりとりから始める。ある程度質問の内容を決め、相手にもそのことを知らせてあり、低学年にあった内容のものが返ってくるよう配慮し、満足感を持たせたい。初めて行うことは、緊張感を伴いどうしても相手に伝わらなかつたり、希望する返答がなくても、なんとなく「それでいいです」と言ってしまうがちである。そこには、表面的な言葉とは裏腹に、満足感はない。できるだけ、わからないなりにでも納得のいく形にしてあげたいところである。そして、日常的に練習する方法として、LANを使って校内でお互いにやりとりすることである。

次に、中学年では、通信の中で自由に話し合いができることをねらっている。自分たちが教室の中で学級会の話し合いがなされるがごとく、ここに他の人がいて、話し合っているようなやりとりができることである。この場合、言葉などのマナーにも気をつけていきたい。

最終段階は、自分たちの必要に応じて、このフェニックスを活用することである。フェニックスの存在が、日常的なものになっている中で、自分たちの目的にあわせて活用の仕方を選択していき、相手と自由に交流できるようにしたいところである。

本実践では、4学年を対象に、フェニックス活用の充実と、社会科の学習における子どもたち同士の自由な話し合

い活動の2点から、導入の手順や子どもたちの実態、実際に行われた内容などを具体的に述べていくことにする。

2. 社会科における情報収集

社会科は、時間的空間的に大きな奥行きと広がりをもつ過去及び現在の社会生活の様子を学習の対象としている。そのため、3・4年生の地域学習を除くと学習の大部分は、子どもたちがその場に出向いて自分自身で見たり聞いたりして直接確認する事が不可能な内容に占められる。

そして、このような社会科の学習の中で、子どもたちが、自分と未知の社会的現実を結び付けるために、今、まさに自分が必要とする情報を得ることが大切になる。

フェニックスの活用は、情報を得る手段の一つであるが、これまで、子どもたちは身の回りにある様々な資料を活用し、情報を取り込もうとしてきた。社会科で利用される資料については、多種多様であるが、大きく次のように分類される。

- | |
|-----------------------------|
| ①文章資料……図書、パンフレット、事典、年鑑、新聞など |
| ②映像資料……絵、写真、スライドなど |
| ③図表資料……グラフ、統計表、統計図表など |
| ④実物的資料……現物、標本、模型など |
| ⑤音声資料……録音テープ、電話など |
| ⑥複合的資料……テレビ、ビデオなど |

たとえば、暖かい地方の人々のくらしの学習では、沖縄地方のパンフレットや図鑑、学習事典、新聞の天気図と各地の気温などといった文章資料や星の砂やさとうきびなど実物の収集、沖縄のビデオの視聴、実際に電話をかけて様子を聞くといった活動を通して情報を収集してきたのである。そして、収集した情報を分析しながら、自然条件や歴史的事実、生産活動などについて理解を深めてきたのである。

しかし、実際には子どもたちが本当に今ほしいと思う情報を得ることができないのが現実である。子どもから、「沖縄は台風が多いけど、台風に対して備えていることってあるのだろうか。」「台風でパイナップルが全滅したらどうやって生活するの。」などといった切実な問題であればあるほど資料化は難しく、子どもにとっては「なぜだろう。」で終わってしまうことが多い。

今ほしいと思う情報を得るために、フェニックスの活用は有効である。なぜなら、自分が知りたいと思うことをリ

アルタイムで見たり聞いたりできるからである。しかも、それが子どもたち同士で行われるならば、あらかじめ準備されている決まった答えをやりとりするのではなく、子どもたちの本音で話ができるといった実感のこもった情報を得ることができるのである。

3. フェニックスの活用に向けて

フェニックスを活用するときに必要な条件として次の三つが考えられる。

- | |
|----------------|
| ①活用する場面や単元の選定 |
| ②協力していただく相手の選択 |
| ③子どもへの指導 |

ー活用する場面や単元の選定ー

フェニックスが有効に活用される場面は、情報を得るのに時間がかかる遠距離の地域の様子についてや自分の地域では見ることができない自然や産業などの様子がリアルタイムで見聞きできるときである。そこで、四年生の学習内容から、自然条件、生活習慣、生産活動など北海道とは異なった暖かい沖縄地方の人々の暮らしの学習に視点を当て、フェニックスを有効に活用しながら学習を進めていこうと考えた。

ー協力していただく相手の選択ー

私たちは、沖縄県にあるフェニックスが導入されているいくつかの小学校から、沖縄島にある学校で、下記の内容で協力していただける学校を探し、依頼することにした。そうしたところ、沖縄県西原町にある沖縄三育小学校が、私たちの考えているフェニックスの活用内容を十分理解していただき、快く協力していただけることになった。

- | |
|---|
| ○一回だけではなく、必要に応じて回数を決めたい。 |
| ○日常的につないでおき、子どもたちが自由に話ができるようにしておきたい。 |
| ○あらかじめ準備しておいた決まった答えをやりとりするのではなく、お互いに必要な情報を交流できるようにしておきたい。 |

実際に授業で活用する前にお互いに一度フェニックスをつないでおくことが大切であるが、この際には、相手のバージョンの確認や1回目の交流をどのように設定するかなど細かい打ち合わせも必要である。

ー子どもの指導ー

今回、フェニックスを使う子どもたちは、日直の仕事の一つとして学級のコンピューターの起動と終了を経験しているため、全員が、コンピューターに触れている。また、これまでも音楽の学習の中でメロディーサーフを使って作曲遊びを楽しんだり、各教科の学習でアンケートや調べ活動のまとめをコンピューターで作成したりしてきた。ただ、フェニックスを使うのははじめてなので、以下の資料を配布し、フェニックスを活用することのよさと活用時のマナーについて説明してきた。

特にマナーについては、生活習慣や文化の違いから相手に嫌な思いをさせないようにすることや言葉遣いについての指導を強調してきた。

4. 事前調査

まず、「暖かい沖縄地方の人々の暮らし」の単元に入る前に子どもたちに沖縄県にかかわる次のようなアンケート調査を行った。

沖縄県の友達とつながる

フェニックスを使って交流がはじまるよ

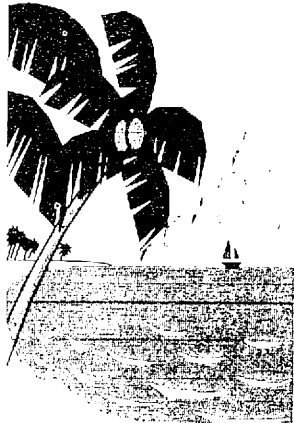
フェニックスってなあに？

テレビ番組の中で、スタジオから「釧路の◇◇さ〜ん」と呼ぶと、テレビカメラが切り替わって「はい◇◇です」と違う画面と人が出てくるのを見たことあるでしょう。簡単に言うとテレビ電話ってところでしょうか。

つまり、同じ時間に違う場所にいる人が、まるで、すぐとなりにいるかのように話ができるシステムがフェニックスなのです。

釧路と沖縄をフェニックスで結ぶと、同じ時間にお互いのその時の様子を知らせ合うことができます。

たとえば、天気、温度、外の様子などもわかるのです。



それでは、いよいよフェニックスを使って沖縄県の友達と交流したいと思います。

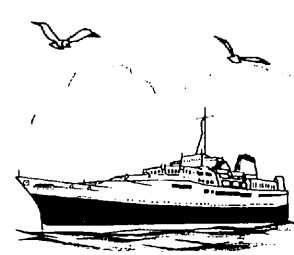
ステップ1

三育小学校の4年生と友達になろう

三育小学校の人達に聞きたいことをメモしておこう。

—フェニックスはマナーが大切—

- ・画面には自分たちの姿も相手の姿もうつっています。失礼のないように。
- ・何を伝えたいのか？はっきりお話ししましょう。
- ・相手が話はしっかりと聞き、質問には自信をもって答えましょう。
- ・わからないことは調べて後で伝えてあげましょう。



社会科アンケート

4年1組 名前 _____

これから、おきなわについて質問します。質問の中で、みなさんが知っていることがあれば、自由に書いてください。

1. 「おきなわ」と聞いて頭に思い浮かぶことがあれば書いてください。

2. 「おきなわ」と「北海道」これから住むとしたらどちらがいいですか。

3. その理由は

アンケートの結果は、以下の通りである。

1. 「おきなわ」と聞いて頭に思い浮かぶことは

- 自然環境にかかわること
 - ・暑い・海がきれい・ジャングル・砂・サルビア・熱帯魚・は虫類
 - ・多くの島々・3月に泳げる・雪がふらない・青・砂浜・ハブ・夏
 - ・半袖・太陽・南・南島・台風がくる
- 歴史的事実にかかわること
 - ・アメリカ軍
- 生産・消費活動にかかわること
 - ・くだもの・ホテル・サルビア・パイナップル・海水浴・ビーチ
 - ・花・やしの実・さとうきび・サーフィン・スイカ
- 文化にかかわること
 - ・シーサー・ゴーヤ・
- その他
 - ・安室奈美恵・SPEED・MAX・沖縄知事・ダイビング・那覇

2. 「おきなわ」と「北海道」これから住むとしたら

・おきなわ16名　・北海道23名　・まよう1名

3. 理由

- おきなわ派

- ・海がきれい・ビーチがある・暖かい・食べ物がおいしそう

- ・安室の出身地

○北海道派

- ・雪がふる・自然がいっぱいある・自分の生まれた所・慣れている
- ・沖縄に行ったことがないから・暑いより寒い方がいい・涼しい
- ・アメリカの基地があつて危ない・泳げない

単元の学習は、このアンケート結果の1について交流し合うことから始めた。その結果、子どもたちから「どんな花が咲くのかな。」「今、どれぐらいの温度なのかな。」「どんな生き物がいるのだろうか。」などといった疑問が生まれたため、三育小学校の友達とフェニックスを通して話をするを伝え、聞いてみたいことを自由に記述させた。

○交流を通して出てきた質問事項

- ・沖縄にはどんな生き物がいるのですか。
- ・台風がきても寒くならないのですか。
- ・1年間の気温の変化は大きいですか小さいですか。
- ・今、そちらではどんな花が咲いていますか。
- ・雨はどれぐらい降りますか。
- ・釧路湿原にたんちょうという天然記念物がありますが、沖縄にはどんな天然記念物がありますか。
- ・今の温度は何度ぐらいですか。
- ・雪がふったことがありますか。(雪で遊んだことはありますか)
- ・雪をさわったことがありますか。
- ・スケートをしたことがありますか。
- ・どことなくだものがとれますか。
- ・1年間に何回ぐらい台風がきますか。
- ・沖縄で盛んな仕事は何ですか。
- ・いつも半袖、短パンで生活しているのですか。
- ・寒いと感じる時はありますか。(あれば、何度ぐらいか聞く)
- ・海がきれいだと聞いているのですが、本当にきれいなのですか。

このような質問をかかえて子どもたちは、はじめてフェニックスを体験することになった。1回目の交流については、三育小学校の先生との打ち合わせで、フェニックスに慣れさせることを目的として、お互いに聞いてみたいこと

を自由に話し合わせることにした。

以下、フェニックスを使って交流している様子である。

5. フェニックスの実践

- ①通信日時；平成10年1月22日（金）
- ②通信相手；沖縄三育小学校
- ③学習内容；暖かい沖縄地方の人々の暮らし
- ④学習方法；フェニックスを通し、質問応答による話し合い

相手の姿がスクリーンに映るまでの子どもたちは、期待に満ちた表情でいっぱいであった。そして、お互いの姿がスクリーンに映った瞬間、初めて出会ったにもかかわらず、手を振り、お互いの出合いを喜ぶ姿が見られたのである。

では、フェニックスがどのように展開されたのか4部に分けて実際の姿を紹介したい。

（T-教師、C-子ども、s-三育、f-附属釧路）

第1部 教師が主体になると

T s ; こんにちは。いつまで、冬休みだったのですか。

C f 全；1月20日

T s ; 1月20日までですか。長いですね。

C f 全；はい。

T s ; 夏休みは、いつからいつまでですか。

C f 1；7月25日から8月20日まで。

T s ; 沖縄は、8月31日までお休みです。

C f 全；いいなあ。

T s ; そのかわり、冬休みは2週間ぐらいしかありません。

C f 全；えー。

T s ; 何か沖縄に質問がありますか。

C f 2；いろいろあります。

T f ; どんな質問でもいいですか。それでは、三育小学校さんのことについて質問させていただきます。

C f 3；三育小学校は何市にあるのですか。

T s ; それでは、新聞係が答えたいと思います。

C s 新；西原町にあります。

T f ; それは、西原町という一つの町ですか。それとも、〇〇市の西原町なのですか。

T s ; 一つの町です。

（釧路小学校の子どもたち、地図帳を使って探す）

T f ; ありがとうございます。

C f 全；あった、あった。

C f 4；三育小学校では学校にスケートリンクをつくりませんか。

T s ; それでは、答えたいと思います。

C s 新；雪がふらないので、スケート場はありません。

T s ; 沖縄では、雪が降らないので、スケート場はつきません。

教師も子どもも初めてのフェニックスということで、最初に画面に映った時の様子とはちがって、緊張した雰囲気になってしまったようである。この段階では、お互いに教師が全体の進行を努め、子どももぎこちない様子である。話が聞こえなかったり、うまく伝わらないときも、何となく、「はい、わかりました。」と言ってしまったり、子どもが「こうしたいなあ。」「こんなものを使ってみたいなあ。」と思っている部分についても、ついつい教師が説明してしまい、子どもにとっては、満足感のない状況のように思われる。しかし、教師の進行によって、「よろしくお願ひします。」とか「ありがとうございました。」などといった言葉遣いなどフェニックスを使うときのマナーが少しずつ子どもに浸透してきたように思われる。

第2部 動き出した子どもたち

T s ; 何か質問があったらどうぞ。

C f 5；ぼくの名前はKです。冬に雪が降ったらどうしますか。

C s 体；うれしいです。

C f 全；それじゃ見せてあげようよ。

とってこようよ。

（C f 7と8、雪を取りに外へ行く）

C f 3；今、雪を取りに行きました。

T f ; 昨日、雪が降りましたので、10cmぐらいつめています。

C s 体；釧路湿原で、丹頂を見たことがありますか。

C f 全；あります。

C s 体；ありがとうございました。

C s 体；釧路平野はどういうところですか。

C f 全；なんとはいいいんだらう。湿原かな。

（子どもたち同士の自然な話し合い）

C f 6；湿原がほとんどです。

C s 体；広いですか。

C f 全；広いですか。って聞いているぞ。何kmぐらいだ。
（子どもたち同士の自然な話し合い）

C f 6；広いです。

C s 体；ありがとうございます。

T s ；個人的に質問があればいいですよ。

C f 6；雪がきたので見せます。(カップに入っている)

T f ；出して見せてあげたら。

(C f 6、雪をカップから出して、カメラの前に差し出す)

C s ；冷たいですか。

(三育ワイワイ騒いでいるような雰囲気)

C s ；さわっていいですか。

(三育の子どもたち手をグッと差し出す)

(C f 6、さらにカメラの前に雪を近づける)

C s ；ありがとうございます。

「冬に雪が降ったらどうしますか。」というK君の質問で流れが変わった。大人から見れば、相手も答えにくい、何とも言えない質問なのだが、この質問により、それまで、何となくカメラの前に座り、フェニックスのやりとりを見ていた子どもたちが動き出したのである。K君の質問に、三育小学校の子どもも答えに困って、「うれしいです。」と言ってしまったのだが、実は、この「うれしいです。」の一言が子どもたちを動かしたのである。「それじゃ、雪を見せてあげようよ。」と言った子ども。そして、取りに駆け出す子ども。雪を見たらどんなリアクションをするだろうと胸はずませている様子がよくわかる。子どもたちは、ようやく北海道らしさを見せることができるとドキドキしていたらしい。

また、さわられるはずのない雪に手を伸ばし、「さわってもいいですか。」と叫んだ三育小学校の子どもたちは、フェニックスを活用し、雪をリアルタイムで見ることのできた期待と喜びがそのまま表れた姿であろう。

少しではあるが、子ども同士の交流がはじまったところに、雪の登場である。この様子を見ながら、教師の進行は一切やめて、子どもたちに交流を任せることにした。

第3部 主体的になってきた子どもたち

C f 9；私の名前は、Oです。釧路には湿原という場所があるのですが、西原町には湿原はありますか。

C s ；ないです。

C f 9；ありがとうございます。

もう一つ、あります。

C f 5；西原町の冬に氷ができたらどうしますか。

C s ；食べます。(笑いがおき、気持ちながんできています)

(手を挙げて質問したがる子どもたちが増える)

C f 10；沖縄には、シーサーという銅像みたいなものと聞いたのですが本当ですか。

C s ；本当です。

C f 6；ありがとうございます。

(C f 6が司会となり進行する)

T s ；シーサーというのは、守り神です。屋根の上や門の上によくおかれています。1匹1匹顔の表情が違って、同じものは無いと言われています。

C f 6；ありがとうございました。

C f 11；沖縄にしかいない動物はありますか。

C s ；ハブです。

C f 全；ハブ？ ハブ？ ハブって何。ヘビだ。

ハブって毒があるよね。ハブって何か聞いてみよう。

(子どもたちによる自然な話し合い)

T s ；ハブってというのは、ヘビの種類です。猛毒があります。毒の強さがコブラ以上だと言われています。

C f 全；えー、こわい。

C f 6；ありがとうございました。

C s ；ぼくの名前はHです。

何か質問がありますか。

C f 9；西原町では、暖かい日は、どれぐらいの温度ですか。

C s ；冬は、26度です。夏は、34度です。

C f 全；えー、

C f 9；寒くてどれぐらいの温度ですか。

C s ；冬は、15度ぐらいです。

C f 全；暖かい。こっちの夏だよ。

C f 6；こちらの寒い日は、だいたいー20度ぐらいです。

C s ；(笑い) 寒いですね。

C f 6；はい、寒いです。

C f 12；私の名前は、Mです。

沖縄の、天然記念物は何ですか。

C s ；ヤンバルクイナという飛べない鳥がいます。他に質問はありますか。

C f 13；どうして海がきれいなんですか。

C s ；自然を大切にしているからです。

C f 全；オー、なるほど、

(自然を大切にしているということに共感している)

C f 13；冬によく見かける動物は何ですか。

C s ；1年中、どんな生き物でも見られます。

C f 全；えー、いいね。

教師の出番がほとんどなくなり、子どもが自然に三育小学校の子どもたちと話すことができるようになってきた。特に、「こんなこと聞いていいのだろうか。」と躊躇していた子どもたちが、自分は今これを聞きたいから聞いているんだとまさに、自分ごととして、伸び伸びと交流している様子が伝わってくる。その結果、相手の話に驚かされたり、共感したりする姿が、最初に比べはっきりと表れている。また、教師の出番がないため、子どもたちの中から、自然発生的に進行を努めたり、普段、あまり、自分の考えを出さない子が質問したいとなると、その子を優先にしてあげたりする態度が見られた。このことは、子どもたちが主体的になっている姿そのものである。

第4部 力みの消えた子どもたち

C f 1 4；沖縄で流行っている遊びは何ですか。

C s；ヨーヨーが流行っています。

C f 1 4；あー、やっぱり。

C s；特産物は、何ですか。

C f 全；何だろう。どれにする。

(子どもたちの話し合い)

C f 6；カニやサンマなどです。

C s；おいしいですか。

C f 6；はい、おいしいです。

C s；今度、食べにいきます。

C f 全；はい、どうぞ。食べにきてください。

C s；沖縄で人気のあるものは、ハローキティです。釧路の人気は何ですか。

C f 1 5；男子は、ハイパーヨーヨー。女子は、マイメロディーとキティちゃんです。

C s；釧路に外人の人はいますか。

C f 6；学校に、2人います。

(C sの自己紹介を聞いて)

C f 1 6；島袋君に質問なんですけど。スピードの島袋さんの弟さんですか。

C s；友達です。

C f 全；キャー。いいなあ。いいなあ。

C s；親戚ではないのですが、お姉ちゃんが島袋ひろこさんと友達だそうです。

スピードは、好きですか。

C f 全；好き。

C s；誰が好きですか。

C f 1 6；島袋さんが好きです。

C s；沖縄に来てみたいですか。

C f 全；はい。

C s；沖縄に来たら何をしてみたいですか。

C f 全；海水浴。島袋さんに会う。シーサーを見る。

フェニックスをはじめた時の形式的な質問のやりとりではなく、自分の生活に身近な話題(スピードの島袋さんについての質問など)での交流がなされている。つまり、話題が子どもたちにとって自然なものになっており、速く離れている沖縄の子どもたちをごく身近に感じている。ここに、人と人とのコミュニケーションが生まれていることがわかる。この後、学校行事のことや果物や花についての交流がなされて終わったのだが、最後に、「また会おうね。」と言いながらお互いに手を振る様子が印象的であった。

6. 子どものふりかえり

これまで、フェニックスの実践について述べてきたが、これは教師側からのフィルターを通したものである。それでは、実際に交流した子どもたちはどのように考えているのだろうか。次の感想は、フェニックスを活用した直後のふりかえりである。

今日は、初めて、フェニックスを使いました。沖縄の映像がうつり、質問をしたり、質問に答えたりしました。沖縄は人口が少なく、三育小学校は1クラスしかなく、生徒も25人と聞いてびっくりしました。また、フェニックスをして、お互いの街のよさを知りたいと思います。今日はとても楽しかったです。

質問はできなかったけど、西原町の人たちはとてもいい人たちでした。あと、沖縄のことも少しわかりました。西原町の人にも雪でおどろいていました。あと、スピードの島袋さんの友達の島袋君もいました。沖縄は、冬でもあたたかくて、日が暮れるのが8時30分ごろだそうです。

沖縄の人たちは、ほくからみたら変だったけど、沖縄の人たちからみたら、ほくらが変だと思ったと思う。雪をさわらせてって言ったときは、びっくりした。スピードの島袋さんの友達がいてびっくりした。沖縄はすごいことばかりだ。

今日は、フェニックスを使って交信しました。わからない

かったことがいろいろとわかりました。自分からは聞けなかったけども、みんなが聞いたのでわかりました。今日はよくできたと思います。

今日は、三育小学校の人と話して楽しかったです。いろいろ聞いてよかった。質問もできてよかった。ほくは一度沖縄にいつてみたいです。

今日は、私が全く想像していないことや、いろいろなことがわかりました。クラスの人気は、思っていたよりも少なかったです。名前の名字も変わった名字の人がいました。これからもいろいろと沖縄のことについて聞いてみようと思います。

私は、インタビューできなかつたけれど、今度ぜったいしたいです。それと、クラスの子たちは、すごくなじみやすく、よかったです。島袋くんにはとてもおどろいたし、ほかにも、おもしろかったこと、おもわず、おーというほどなつとくしたことがありました。いろいろ体験できてよかったです。

今日は、初めて沖縄三育小学校の人と交流をはじめました。はじめてだったので、ちょっときんちょうしました。わたしは、もっとおしとやかだと思ったのに、私たちの学校みたく、元気で明るい人たちが多くて、びっくりしました。でも、ちょっと安心しました。私たちと同じでいろいろと西原町のことがわかってよかったです。

今日は、沖縄の小学校の人たちにパソコンで通信しました。大きいスクリーンにうつしてみんなでみました。私は、質問を1回だけしました。むこうの人たちがきちんと答えてくれたのでとてもよかったです。これで、沖縄のことがほんの少しだけわかったような気がします。これからももっと調べたいです。

ここに掲載しているふりかえりは、一部分であるが、全体を通していえることは、楽しかった。次もやりたいなど子どもたち意欲の高まりがみられたことである。また、フェニックスを通して沖縄のことが少しわかってきたという満足感もみられた。確かに、リアルタイムで遠距離のこ

とを現実に見ることのできるよさがあり、子どもたちが自分で社会科の学習に活用できることを実感している。同時に、コミュニケーションを図るためのフェニックスというところも見逃せない。なじみやすくよかつた。私たちと同じで安心した。などという感想からそのことがよくわかる。1回目の経験をもとに、2回目の交流へ向けて早くも準備を始めている子もいた。

7. 終わりに

1回目ということで、あらかじめ決めておいた質問のやりとりから始まった。また、教師が進行したため、子どもも形式的に質問をし、それに答えていくという展開であった。そのため、時間も長くなり、あきてきた子どももいたのが現実である。ただ、途中で子どもたちだけで会話をさせたところ、それまでの形式張った質問はなくなり、本当に今聞いてみたいと感じたことを話し出した。たとえば、スピードの……子どもたちの本音が表れた場面である。

また、雪を見たいという相手の要望に、雪を取りに行つてカメラの前に差し出す子どもや、温度はどれぐらいですかと聞かれ、外の温度を計りにいってそれを数分後に伝える子どもの姿に、リアルタイムのよさも見えてきた。

特に、感動的だったのは、外からもつてきた雪をカメラの前に差し出したときの三育小学校の子どもたちの反応である。「その雪さわらせて」とほとんどの子が手を伸ばしたのである。さわられるはずなどないことはわかっているはずなのに、つい手が出てしまったのであろうが、まさに、リアルタイムで本物の雪を見たために表れた子どもの素直な感情であろう。

1回目の実践から見えてきた成果と課題はたくさんある。特に、形式張った質問をやめて、社会科の学習の中で子ども一人一人が目的意識をもって、必要なときに必要な情報を得ることができるようなフェニックスの活用方法について考えていくことが大切である。

と同時に、今知りたいことが聞くことができるように、フェニックスを日常的に使うために、相手との連絡を密にし、同じ時間に社会科の学習を設定するなどの必要性を感じた。ただ、相手のあることなので、なかなか実現しないところが今後の課題であろう。